

飯田龍太

加藤知世子

加藤知世子

中島斌雄

石田波郷

石原八束

角川源義

森澄雄

# 俳人句話

上

現代俳人たちの風貌と姿勢

角川書店

現代俳人たちの風貌と姿勢

# 俳人句話

上



木  
林  
澄  
雄

江苏工业学院图书馆  
藏书章

角川書店

## 俳人句話(上)

現代俳人たちの風貌と姿勢

平成元年九月二十五日初版発行

著者——森 澄雄

発行者——角川春樹

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二―一三―三

〒102 振替東京三―一九五二〇八

電話／営業部〇三―八一七―八五二―

編集部〇三―八一七―八四五一



印刷所——凸版印刷株式会社

製本所——株式会社鈴木製本所

落丁・乱丁本はお取り替えいたします

Printed in Japan

ISBN4-04-883238-7 C0095

俳人句話―現代俳人たちの風貌と姿勢(上)／目次

石田波郷論——批評と戯作

七

中村草田男論——その難解性をめぐって

二三

飯田蛇笏論

二九

現代俳句鑑賞——山口青邨

四〇

松本たかし鑑賞

五三

現代俳句鑑賞——大野林火

六七

加藤知世子論——『冬萌』に就いて

八〇

西東三鬼論

九七

現代俳句鑑賞——石田波郷(一)

一三三

現代俳句鑑賞——石田波郷(二)

一三五

師を語る 加藤楸邨

一三九

現代俳句鑑賞 石田波郷(二)

一四三

現代俳句鑑賞 石田波郷(完)

一五五

中島斌雄論

一六三

『百戸の谿』

一七九

細谷源二

一八四

矢部栄子さんの死

一九八

『秋風琴』 石原八束句集

二〇〇

『病雁』 鑑賞

二〇六

蒼石氏へ

二二三

角川源義小論

三三

竹林清明——『歙江句集』雜感

三三〇

八束遠近——『現代俳句の幻想者たち』を中心に

三三二

解説

岡井省二  
三五九

初出一覧

三六七

評論対象作家一覧

三六九

# 俳人句話

— 現代俳人たちの風貌と姿勢（上） —

装画／森 潮

装丁／伊藤 鑛治

昭和二十三年

石田波郷論——批評と戯作

一

句集『雨覆』の後記——

この九月初め宿痼<sup>しゆくゑ</sup>再び発し、目下日夜牀中にある。私はもはや健康な将来を期待することは出来ず、余すところの命も多きを願ひ得ない。

されば今、私は、私の俳句は散文の行ひ得ざることをやりたいと念ずるのみである。日々に命の灯<sup>たか</sup>を待み得ぬものが、何うして散文の後塵<sup>こうちん</sup>を拝するの十七字を弄<sup>もてあそ</sup>ぶを得んや。呵々<sup>かか</sup>。

僕の脳裡<sup>のうり</sup>には、一枚の『大足』巻頭に掲げられた波郷<sup>はきょう</sup>の映像が今なおいきいきと生きている。帝都線駒場駅<sup>こまば</sup>前に茫洋<sup>ぼうよう</sup>と懷手をして立った野放図な着流しの波郷図である。不敵な構図だが、一

抹の微風にも堪えた繊細な哀情が漂う細目、蓬髪長身の波郷の風貌を僕は忘れぬ。僕はゆっくりなく、この後記から『雨覆』を読んだのであるが、何か切ない哀情が胸にからんだ。この不敵な風貌と共に、すぐ、病床に長身を投げだして病み衰えた波郷が眼前に浮かび、それから明日の命の灯を待み得ぬものの、何か清潔な決意が、筋肉の隅々にまで一本一本筋金が入ってゆくようにみえぬ様が見えるのであった。

稲妻のほしいまゝなり明日あるなり

波郷

序

天数の限りしらるゝ夕まで……(鬼貫 佛兄七車)

波郷はこの序に千万無量の思いを罩める。千万無量の思いのなかから、今日の決意が生まれ、明日への覚悟が湧く。絶対の孤独と決意のなから作家は今日の生命の灯を燃やす。批評とは一体何だろう。こういう絶対の孤独の前に僕は何を言ったらいいのか。おそらく、ここで、作者が最上の批評家だろうが、この後記は、僕に、作者と同じように、全ての作品を容赦なく愛惜し、容赦なく裁断させる。

二

波郷俳句は彼の情感の頂点で発止と打ち出される。まさに発止であつて、その間いわゆる抒情という曖昧な要素を挿し挟む余裕はない。

舷梯や母こそかなし夜の秋 波郷  
妻が来し日の夜はかなしほととぎす ”

のかなしにしても抒情というようなものではない。日常の魂の殻を突き破つて、一瞬胸を刺すようにこみ上げて来る、ほとんど原始的な、赤裸な人間感情の真率な吐露だ。それ以外の何ものでもない。彼の作品はまさしく哀感の音楽だが、この音楽のメロディは世のいわゆるかなしい抒情句のメロディよりはるかに短いのである。ほんの一息だ。ほんとうのかなしさは一瞬突風のよう僕らの肺腑を抉つて去る。あと、僕らはいつものように、何気ない顔で飯を食い、糞をたれ、友達と談笑する。現代の抒情詩家みたいに何時までもかなしげな顔をしないのである。彼の音楽のメロディの短さは、同じかなしを用いた

寒き夜は傷や痛むとわが悲しむ 秋櫻子  
湖かなし夏山の奥にかたむけり ”

『俳句になる風景』『花の句作法』を書いたこの表現上の美意識家の、あれでもない、これでも

ない、と探し出して来た、かなしと比較すればはつきりするだろう。「自然の真と文芸上の真」を掲げて俳句における抒情を宣言したこの作家の歩いた道程は、中世の俊成や定家という短歌表現上の審美家連が辿った道程と異なるところはない。この作家の過去の華麗から今日の枯淡に至る推移を、評家は様々に言挙げするが、表現美学上の、いわば文芸的美食家の食欲上に嗜好的変遷が起こっただけではほとんど問題にするに足りぬ。意識したかなしは一種の思考上の操作に過ぎぬ。作者はいかにも涙を流したげであるが、涙なぞ一滴も流れはしまい。言っておくが、人間の涙の中で一番純粹で真率な泪はいつも「不覺の泪」だ。

白桃や心かたむく夜の方 波郷  
 黄昏や白桃を食ふ齒を開く ”

波郷俳句は白桃の様にみずみずしい水気の中に何かギョツとする人生の機微を発止と攔む。素手で。だが読者が素手で不用意に近づくと、突然胸元に匕首が突き刺さる。あらゆる幸福の条件を具えて人間が不幸であり、生が死に、死が生に、あらゆる人生の価値が一挙に逆転する、生の根柢には常にこの逆転を企む可能性の魔がひそむ。このひそかに企まれる人生の深い虚構にどっかり胡座をかきながら、静かに、白桃のように豊かな水気を包み、彼の魂は白桃を食う黄昏の齒のように白く、冴える。

神田秀夫氏は『雨覆』と波郷「現代俳句」八月号において、「反語的な把握」だとか「養素

にして「毒素」だとか、「素早い鉋かんの、それも鉋の跡を見せぬ刃先」だとか「浮力」だとか「速度」だとか、手を代え、品を変え、同じことを繰り返し如何いかにも無器用に喋しゃべっているが、僕の言い方が上等だなぞというのではない。千万言も俳句の一句を覆うに足りぬとも言えようか。波郷俳句のもつある本質的性格が、批評を拒絶し、あらゆる批評を無器用にしてしまうのだ。そこに俳句芸術の、あるいは高度の作品がもつ一つの秘密があるのだが、僕も神田氏にならって、波郷俳句の速度のことを言おう。仏教は僕らに人生の無常迅速を教え、僕らはいかにもそうだというふう  
に観念する。だが仏教の、あるいは僕らの観念する無常迅速より、本当にやって来る人生の無常  
迅速はいつも少しばかり無常迅速なのだ。その人生の無常迅速のように波郷俳句は、素速く、美  
しい。

細雪妻に言葉を待たれをり 波郷

道すがらうかぶ木槿や徒労ばかり ”

風の日は風吹きすさぶ秋刀魚の値 ”

野分中つかみて墓を洗ひをり ”

露の虫急ぐばかりに人駈出す ”

馬車馬をあはれ走らす降り出す雪 ”

雁の束の間に蕎麦刈られけり ”

鳩の岸女いよいよあはれなり ”

だが、ある時、作家は、作品の中で、この人生の無常より素早く無常迅速を覚悟するかも知れぬ。生きながら、作品の中で、死を呼ぶかも知れぬ。

### 霜の墓抱き起されしとき見たり 波郷

波郷の詩魂はまるで僕に、この作品の中に、そう語っているように見える。が、すぐ背後に一本の琴線の様な意志がぴーんと張る。石橋辰之助氏が死んだとき、楸邨氏にあてた波郷の葉書の中に「僕は死なぬ」とあったそうだが、それを聞いたとき、この句とこの言葉が重なり、僕はそこに切ないほど張りつめた一つの詩魂の奥を覗くような思いであった。ともあれこの句は、意外に深く、はるかな、生と死と、人生と創造との相亘るのつびきならぬ虚構に、批評の根源といったものに誘ってゆくようである。

### 三

島崎千秋氏の「俳句批評の問題」(「現代俳句」七月号)という文章は多分「作家の批評に対する不信はここ暫らく続くだろう」という意味の結語で終わっていたように思う。僕は雑踏する電車の中で読んだので、いまは何が書いてあったか、すっかり忘れてしまったが、この結論だけが印象に残った。結論としては大変平凡だが、僕はそこに様々な感慨が湧き、池袋から東京駅までの

省線を退屈せずにすんだ。「批評への不信」が、批評家らしい批評家のいない俳壇、対立的な感情以外の興味で批評を受け取ろうとしない俳人、そうした俳人たちがうようよ低迷している俳壇——いやいや、そういうところに落ち込んではいけない、そうした皮肉な感慨は別としても、高度の作品がもつ批評への拒絶性、真正の作家の批評への不信、その不信が生まれるまさにその点に批評家が口づけに吞まねばならぬ批評の源泉があるのではないかと、僕の想念は様々に湧き、危うく乗り越すところであった。

岩田潔氏なぞをほとんど唯一の批評家として許して来た俳壇も、赤城さかえ氏の出現によって初めて評論家を得た感がある。赤城氏の「詩人宣言」、それに続く一連の同種の論作は、氏一流のイデオロギーに支えられた確固たる方法論で書かれ、たいへん建設的で、その意味で題名の示すごとく誠実で健康な文章であった。好評を得た所以だが、俳壇批評もまたこの人を得て初めて確固たるイデオロギーによる論理性を得た観がある。イデオロギー評論が、今日の現実において一応基礎的な建設面をもつ限り、僕はイデオロギー評論の健康性を買うが、窮極のところでも僕のなにかが納得しないのだ。一つのイデオロギーのシステムにかかった魚よりも、逃がした魚の方が大きい気がしてならぬ。

いまの僕は僕のなかから一つのイデオロギーが喪失したところで、人間の詩が擱めないと思っていないし、ましてこの現実の動きが擱めないなぞとも思っていない。混沌なら混沌のままで、巨大な人類の歴史の渦が、まるで巨人の筋肉かなにかのように、隆々と動いているさまがはっきりと見えて来ないとは限るまいと思っているから。はっきり見た上で、思想のシステムが創造さ

れても遅くはあるまいから。第一この巨人の筋肉の動きを何時もはつきり見届けている方がよほど大事だと僕は信念しているから。イデオロギーは僕らの外部にあり、詩魂（思想）は僕らの内部に生きる、はつきりそう心得ているから。がともかく、氏の「草田男の犬」という奇妙な題目の文章は、意外な反響を呼び、奇妙な論争をひき起こしたようである。

僕は当の「草田男の犬」なる一文に接する機会をもたなかったが、最近、氏の「続草田男の犬」を読み、問題の大体を知ることが出来た。論争の主要な一部は、草田男氏の戦時中の作品「壮行や深雪に犬のみ腰を落し」に現れた犬が、作者の軍国主義的思想を負うものかどうかという重大な一事にかかっているようである。氏はその「続草田男の犬」の中で、この句に自身二、三の改作を試み、深雪の句の悲壮調を立証した上で、この犬が決して軍国主義的思想を負うものでないと断じ、この基礎的な理解がなければこの句の充分な味到には至らない、というふうに語っているように思われた。

いま僕は誰がこの説に反対し、加担したか知らないが、氏の誠実な精緻な論理的な鑑賞が、必ずしもこの句の正しい理解に至るものとは思われぬ。氏の誠実な文章と離れて、この論争自体が空しく、むしろ、この犬、主人の重大事だ、もっと慎重に扱ってくれと言いたげな顔に見えた。この犬が何れのイズムを負うにしたところで、そういうイデオロギーのみの解釈で、この句のもつ人生の厳粛な一面面に到りつくとは思われぬ。真実の詩魂は、その作品の中で、作家のイデオロギーやイズムよりも、もっといつつわりない、あるいはまぎれない人間のなげきを伝えないとは限るまい。そして、そういうなげきは、イデオロギーや美学の解釈をいつも絶するだろうから。